

プラン・ユースグループ

2020年度活動報告書



PLAN YOUTH GROUP
for Plan International

2021年8月

Introduction

プラン・ユースグループとは

国際NGOプラン・インターナショナルは、子どもの権利を推進し、貧困や差別のない社会を実現するために世界70カ国以上で活動する国際NGOである。2013年よりグローバルで若者の組織意思決定への参画が謳われるようになり、2014年に日本のプランにもプラン・ユースグループが設置された。プラン・ユースグループの活動は、大きく2つに分かれる。1つ目は、理事会や役員定例会への出席のほか、国内の居場所のない女の子を支援する国内支援事業へのアドバイザー活動。2つ目は2019年4月からプランのアドボカシーグループと共同した、アドボカシー活動である。今年度は、国内におけるオンラインハラスメントの実態を調査し、ソーシャルメディア利用環境整備機構(SMAJ)、内閣府、文部科学省との意見交換会を実施した。また、生理や避妊、多様な性のあり方をテーマとした包括的性教育に関するワークショップも開催した。



今年度作成したユースグループのTシャツ

プラン・ユースグループの2020年度

2020年

- 7月 オンライン・ハラスメント 調査準備
役員定例会出席
- 8月 オンライン・ハラスメント 調査準備
- 9月 オンライン・ハラスメントFGD インタビュー
報告書作成、理事会出席
- 10月 SMAJに提言提出
理事会出席
- 11月 包括的性教育アンケート調査・WS 準備
- 12月 包括的性教育アンケート調査・WS準備
役員定例会出席、グループの活動報告

2021年

- 1月 包括的性教育アンケート調査実施
- 2月 包括的性教育アンケート調査報告書作成、
オンライン・ハラスメント内閣府提言
理事会出席、事務局サステナビリティに
関するアンケート調査
- 3月 包括的性教育ワークショップ実施、
オンライン・ハラスメント文部科学省提言
- 4月 新メンバー募集、事務局サステナビリティ
向上に関するアンケート調査報告書作成
- 5月 オリエンテーション
- 6月 アドボカシーテーマ決め、事務局サステナ
ビリティ向上に関するアンケート調査の報告会

Advisory アドバイザリー活動

今年度のアドバイザリー活動概要

1節 組織意思決定への参画

2節 事務局サステナビリティ向上に関する調

1項 調査・助言活動の概要

2項 Eco (+gender, inclusion) に関する調査

3項 Well-Beingに関する調査

3節 国内支援事業に関するアドバイジング

4節 ユース・エンゲージメント強化に向けた活動

2020年度のアドバイザリーチームは、主に4つの活動を行った。1つは、組織意思決定への参加である。理事会や役員定例会など、事業推進や経営・運営に関わる意思決定の場に参画し、ユースの意見を表明した。2つは、サステナビリティレポートの作成・提言である。エコ、ジェンダー&インクルージョン、ウェルビーイングの観点からプラン・インターナショナルのサステナビリティを調査・評価し、アドバイジングを行った。3つは、国内支援事業の伴走である。職員とミーティングを実施し、より女の子に寄り添った支援を実現できるよう意見交換を行なった。4つは、ユースエンゲージメントの検討である。プランの中にユース・グループがある意義を最大化するために、より良いユースエンゲージメントのあり方を検討した。

1節 組織意思決定への参画

グローバルで若者の組織意思決定への参画が謳われるようになり、2014年にユースグループが日本のプラン・インターナショナルに設置された。プラン・ユースグループのアドバイザリー担当に求められていることは、理事会や役員定例会に出席し、ユース世代の意見や感覚を組織の事業や方向性に反映させることである。今年度は、理事会が計4回、役員定例会が3回開催され、ユースがオブザーバーとして参加。収支予算書やICTシステムの改新などについて意見を述べてきた。

そして今年度は、長年目標のひとつとして掲げてきた「ユース理事を誕生させる」という目標が達成された年度でもある。元ユースグループのゲレロ・マウリシオ・ホセ・カルロスさんが理事に就任。ユースグループ出身の理事が誕生したことで、組織意思決定の場におけるユースエンゲージメントが促進されることを願う。



2 節 事務局サステナビリティ向上に関する調査

1 項 調査・助言活動の概要

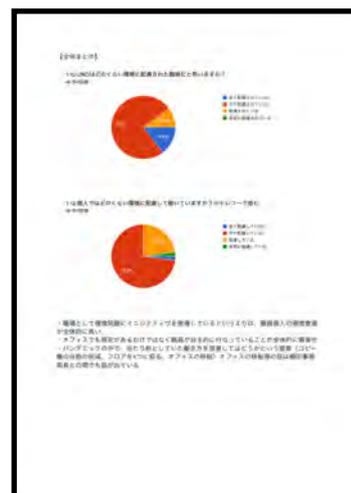
本調査は、プランを「より職員にも、地球にも優しいオフィス（＝サステナブル）にすること」が目的である。背景にはユースがプランに期待する2つの願いがある。1つ目は、世界中の子どもたちのために活動する機関であるからこそ、子どもたちだけでなく、職員自らを大切にできる働き方ができる機関であること。2つ目は、事業としての支援だけでなく、次の世代に対して、身近な行動からより良い自然環境を保障する機関であることである。

これらの、2021年2月から3月にかけてアンケート調査、インタビュー調査、プラン・インターナショナル事務局訪問を通して調査し、以下の助言活動を行なった。

2 項 Eco（+gender, inclusion）に関する調査

エコ・ジェンダー＆インクルージョンではプランの環境問題に関する取り組みと、多様性・包括性を保障するための取り組みの2点を調査した。エコでは、電力消費や業務に使う資材の環境負荷などについて、職員を対象としたアンケート、インタビュー、オフィスの観察を通して、事務局全体での取り組み及び職員個人の意識の実態を調べた。ジェンダー＆インクルージョンでは、性の多様性や障がいの有無などの個人の特性が、評価採用や業

の支障にならない制度や職場環境があるかに焦点を当てて調査を行なった。



3 項 Well-Beingに関する調査

Well-Beingに関する調査では、ワークライフバランス、働き方、心理的安全性に着目した。プランで働く職員が身体的・精神的・社会的に健康であるか調査するため、アンケートとインタビューを実施した。調査から、コロナ禍でのリモートワークで生じている特有の課題や、職員の働き方の現状などが明らかになった。これらに対し、職員のウェルビーイングが保障される働きやすい環境を作ることができるよう、プランに提言を行い、報告書を提出した。

Figure 3: Screenshot of a survey form titled 'JNO職員のWell-beingに関するアンケート' (Survey on JNO Staff Well-being). The form includes questions about work-life balance, remote work challenges, and mental safety.

3節 国内支援事業に関するアドバイジング

プラン・インターナショナルは2020年に池袋に国内の女の子を対象にした居場所「わたカフェ」を開業、それに並行してオンラインのチャット相談を開始した。アドバイザリーチームは、開業前から居場所のコンセプトやネーミング、ロゴの考案などに対しアドバイジングを行ってきた。今年度は、プランの職員とのミーティングを重ね、オンラインチャット相談やわたカフェの運営に対して助言活動を行なった。特に注力したのは、効果的なSNS運用についてである。支援を必要としている女の子に事業を知ってもらえるよう、SNS利用の現状などユースの実態を共有し、意見交換した。そのほかにも、カフェに置く本やカフェ内の感染対策についても提案を行なった。今後も、より対象者に寄り添った事業の展開に継続して助言していきたい。



4節 ユース・エンゲージメント強化に向けた活動

アドバイザリー活動の中で、プランにおけるユースグループの活動意義を最大化するためにユースと事務局の連携体制を改善する必要があるという課題が浮上した。それを受け、より良いユース・エンゲージメントのあり方を模索し、現状改善を図る、ユース・エンゲージメント(YE)検討会が発足。YE検討会はアドバイザリーとアドボカシー両担当メンバーで構成され、2020年10月から活動を開始した。

議論を通して現状の課題を分析し、職員とミーティングを数回行い、有効なユース・エンゲージメントの達成に必要な具体策を考案した。新入職員の入局オリエンテーション時にユースグループからの説明を含めるなど、考案された具体策の中ではすでに実現化されたものもあり、残りの具体策も次年度以降に本格的に実施する準備が行われた。今後は、ユース・エンゲージメントの評価体制も築いていく予定である。

ユースエンゲージメント 検討会とは？

YAP ALL (YAPアドバイザリー・アドボカシー合同)の有志で、**JNOとYAPが最強のタッグを組めるような関係性を検討する会**を発足した。

本事業を進める中で、YAPに連携を求めたいと思ったことはありますか？

【私たちが考えるJNOとYAPの理想の関係性】

- ① JNO職員とYAPが双方の活動内容を理解しており、プラン及びYAPの可能性を期待し合っている関係性。
- ② プランを世界で一番子どもたち(ユース含む)に近いNGOにするために、遠慮せずにお互いの活動についてフィードバックできる関係性。
- ③ 常にJNO職員の頭の片隅にYAPの存在があり、お互いが協力し、相互に良い影響を与え合う関係性。

理想の関係性を達成するための具体策

1. JNO職員にYAPを知ってもらおう
 - PLANの新入職員にYAPに関するインプットする機会を設ける。 **→4/1 新入職員オリエン実施**
 - 年に数回程度、職員を対象としたYAPの活動報告会を開く。
 - YAPが活動報告新聞(YAP月報)を作成する。
2. YAPメンバーがJNOのことをもっと知っていく
 - YAPがJNOが行う活動を定期的にインプットできる機会を設ける。
3. YAPとJNO職員の交流機会を増やし、信頼関係を築いていく
 - PLAN主催のイベントに裏方で参加する。
 - PLAN主催の職員以外も参加可能な内部勉強会や全体ミーティングにYAPも参加する。
 - YAPと職員が交流できる機会を増やす。(インタビュー、インスタライブ等)
4. お互いをもっと活用する
 - 双方の活動に対しフィードバックをもらう機会を作ることで、アドバイスを受けたり、ニーズを把握する。
 - JNOとYAPが気軽に連絡を取り合うことのできる方法を確立する。

ユース・エンゲージメント検討会での資料

Advocacy アドボカシー活動

今年度のアドボカシー活動概要

1節 国際ガールズ・デーに向けた提言活動

- 1項 活動について
- 2項 提言活動① (SMAJ)
- 3項 提言活動② (内閣府・文部科学省)

2節 包括的性教育に関する啓発・提言活動

- 1項 調査目的・背景
- 2項 アンケート調査について
- 3項 ワークショップについて

3節 その他

- 1項 グローバル・コラボレーション企画
- 2項 広告ジェンダー像 登壇

オンライン・ハラスメントと包括的性教育の2つのジェンダー課題に焦点を当てて活動した。

プランは毎年、国際ガールズ・デーに合わせて、アクションを実行している。2020年のテーマは「女の子にオンライン上の自由を」で、プランによる調査の考察に加え、有識者や活動家へのインタビュー、ユースを対象としたフォーカス・グループ・ディスカッションを行った。調査分析から作成した提言書を、SMAJ、内閣府、文部科学省に提出し、意見交換を行った。オンライン・ハラスメントの調査後、ジェンダー課題の根底には教育が関連するのではないかと再認識した。そこで、ユースの現行の性教育、そして包括的性教育への印象について調査した。調査結果を基にユースが特に関心のある、「生理、避妊、SRHR*」と「性の多様性」についてワークショップを実施した。

*Sexual Reproductive Health and Rights性と生殖に関する健康と権利

1節 国際ガールズ・デーに向けた提言活動

1項 活動について

プラン・インターナショナルは、2020年10月、日本を含む世界で、SNS等における女の子に対するオンライン・ハラスメントの実態を調査した世界ガールズ・レポート2020「女の子にオンライン上の自由を」を発表した。このレポートの発行にともない、プラン・ユースグループは、日本の実態を知るために定性調査として、日本国内の有識者、政治家、活動家へのインタビュー調査、ユース世代の若年女性・若年男性とのフォーカス・グループ・ディスカッションを実施し、レポートにまとめた。これをもとに、オンライン・ハラスメント問題の可視化と認知促進、社会における対策の推進を目指し、SNS企業業界団体や省庁に対して提言活動を行った。



女の子・女性に対するオンライン・ハラスメント
調査報告書

2 項 提言活動①（ソーシャルメディア利用環境整備機構：SMAJ）

2020年10月9日、一般社団法人ソーシャルメディア利用環境整備機構、その会員企業の皆さまと、オンラインで意見交換会を開催した。プラン・ユースグループの行った有識者や活動家へのインタビュー、同性代のユースを対象としたディスカッションの分析結果をもとに作成した提言書を発表した。

有識者とユースの両者が共通して求めているのがSNS企業の対策であった。被害者の自己防衛だけに対策を任せるのではなく、加害をさせない機能の追加、加害者への措置などのオンライン環境をSNS企業全体で整えていくことが必要だろう。



ユースと提言を受け止めてくださったSMAJ
会員企業の方々

3 項 提言活動②（内閣府・文部科学省）

内閣府男女共同参画局、文部科学省総合教育政策局の方々、私たちユースグループが一年かけて完成させた提言書を提出することで、オンライン・ハラスメントの現状を伝えた。各省庁がどのようにこの問題について取り扱っているのかを知ることができ、非常に良い経験となった。

政府の方々にはユースの声に真摯に耳を傾けてくださり、有意義な意見交換をすることができたが、私たちが最も重要視していた誹謗中傷などの「言葉の暴力性」による被害やそれに関する教育については未だ対策がなされていないと感じた。「オンライン・ハラスメント」の認知度は依然として低いが、多くの女性や女の子は現に今も苦しんでいる。実質的解決を目指すためにも、公的機関の素早い対応は不可欠である。私たちユースの声が現実政策に活かされることを強く望む。



ユースと内閣府共同参画局の方々

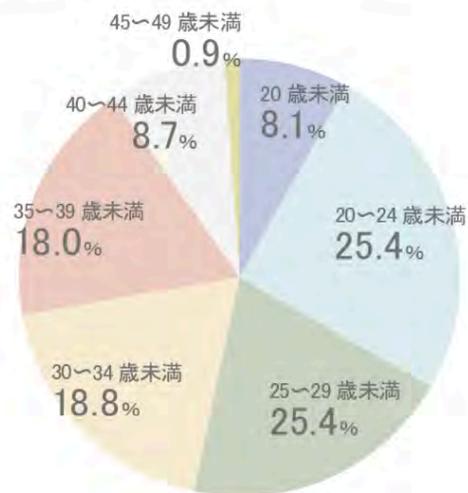


ユースと文部科学省総合教育政策局の方々

2節 包括的性教育に関する啓発・提言活動

1項 調査目的・背景

日本では学習指導要領のはじめ規定などのために、ユースは性について十分に学べておらず、令和元年の人工妊娠中絶件数のうち24歳未満の中絶件数は約3割を占めている。このような性の社会問題に対して有効な解決策が包括的性教育で、人権をベースに科学的情報を根拠に性の自己決定権を教えるものである。もしユースが性教育に不安を抱え、包括的性教育を望んでいるなら、早急に性教育の改善を進めなければならないのではないかと考えた。ユースが性教育についてどのような考えを持っているか知るために調査した。



厚生労働省「令和元年衛生行政報告例の概況 母体保護関係」より担当者作成

2項 アンケート調査について

現行の性教育に対するユースの考える問題点や、包括的性教育に対する印象、期待値に関してユースメンバーが原案を作成した上で、LINEリサーチプラットフォームを利用して、15歳から19歳を対象に、アンケート調査を行なった。

調査を通して、現行の性教育の問題点として、歯止め規定のために、妊娠出産に関して曖昧な知識しか得られていないこと、人権等の項目の教育が不十分であること、教師側の意識や環境によって性教育に対して恥ずかしさを覚える風潮があることが考察できた。上記の問題点を踏まえて、包括的性教育の導入の必要性を提言した。



ユースから見た日本の性教育の実態調査報告書

3項 ワークショップについて

アンケート結果から、ユースが特に学びたいと感じている項目が明らかになった。2回のワークショップを開催した。オンライン上で15歳から24歳を対象に、それぞれ「生理、妊娠、SRHR」「性の多様性」をテーマに行った。私たちからインプットをした後に、少人数に分かれて議論をする時間を設けた。その中で、親や先生の世代つまり大人にも、もっと包括的性教育の内容について知ってほしいという意見が多々あった。包括的性教育の内容に触れることで、性教育に対するイメージがポジティブになるということも、ワークショップの事前事後アンケートの比較から明らかになった。



3節 その他

1項 グローバル・コラボレーション企画 GIRLS GET EQUAL LISTENING SESSION

プラン・インターナショナルは、Instagram、Facebook、Whatsappとオンライン・ハラスメントの防止に向けて、継続的な意見交換を行った。日本を含む10か国のユースと、5人の有識者が対話に参加した。全7回のセッションで、コミュニティ・ガイドラインの課題や解決策を模索した。

SNSを使用する10カ国の女の子と若い女性に、実際に目にするオンライン・ハラスメントの課題についてアンケート調査を実施した。3社からも、現在適用されているポリシーなどの説明を受けた。多様な国と地域から参加するユースの考察、そして企業とのディスカッションをもとに、女の子がオンライン上の自由を持てるよう、提言を提出した。

改善点として、多様な文化や言語に対する配慮、通報機能の円滑化が挙げられた。

例えば、コミュニティ・ガイドラインをわかりやすくするために動画や画像を使用した啓発方法の工夫、多様な利用者への配慮のためにコンテンツ・モデレーターの増員・多様化、また若い女性がコミュニティ・ガイドライン作成の決定段階に参画できるよう求めた。

提言を踏まえ、最後のセッションでは、提言内容の適用の可能性について報告を受けた。例えば、迅速に対応できるよう、通報時に選択するカテゴリーの細分化を求めた提言は、カテゴリーが細かくなりすぎるとかえって利用者が通報しなくなってしまうという懸念から難しいとされた。しかし、それ以外の提言は採用され、準備段階に移っており、オンライン上の経験が向上されるよう模索している姿が見れた。

2項 広告でのジェンダー描写 イベント登壇

2019年度の国際ガールズデーに寄せて、アドボカシー担当は「映画や広告でのジェンダーの描かれ方」について調査を実施した。その上で、今年度、Ideas for Good主催、「Media for Good “ジェンダー・ポジティブ”な広告を考えるワークショップ」に登壇した。

イベントでは、実施した調査のまとめを発表した上で、参加者とジェンダー不平等を助長しない広告はどのようなものか考えた。そしてそれは、宣伝効果を果たしながらも、特定の人を決めつけず、また否定しない、そして優劣をつけないものであることを確認した。

広告はジェンダー・ステレオタイプを加速させることも、社会を変えることもできる存在であるからこそ、広告におけるジェンダー像について、啓発活動を行うことの重要性を再認識した。



左：ユースが考えるジェンダー平等に配慮した広告にするためのチェックリスト

右：広告でのジェンダー描写に関するユースの意識調査

Other activities その他の活動

ユースグループ全体の活動について

2019年からアドボカシー・啓発担当とアドバイザー担当をユースグループとして統合した。統合した理由のひとつに、連携の低さがある。そこで、ユースグループ全体会(両担当者参加必須の会合)を月1回の頻度で開催してきた。

全体会では、お互いの活動の進捗共有やユースグループの最大のテーマであるユースエンゲージメントの在り方についてメンバー間で議論を重ねてきた。今後も全体会を通してお互いのグループが持つ強みを活かし合っていきたい。



Voice ユースメンバーの声

アドバイザーメンバーの声

アドバイザー担当で活動し、真の意味で子どもたちのための組織であるために、「ユースとして大人たちに伝えるべきことは何か」をたくさん考えた1年だったと思う。ユースの力を信じてくれるプランの職員の方々との対話や、実際に組織や社会をより良くしようとする同世代の仲間との活動を通して、ユースが組織の意思決定に参画する重要性を強く感じた。(桑原)

1年間の活動の中で何より私自身、改めてユースの持つパワーと可能性を認識する機会が多くあった。自分たちのアドバイジングを通して、ユースの視点が実際に組織に反映され、変化が起きる場面を見届けることは、自分の発言への自信にもつながった。また、同年代のメンバーの仲間がプラン外でも積極的に社会を変えようと行動を起こしている姿からも多くの刺激を受けた。ユースグループの活動を通して、自分自身もプランと共に成長出来たのではないかと感じた。(村田)

アドボカシーメンバーの声

1年間のアドボカシーでの活動を通して、改めてユースが企業や公的機関に提言する意義とは何かを追求することができたと思う。特にユースの当事者性の高いオンライン・ハラスメントに関しては、省庁の方との意見交換で、私たちユースと先方の危機意識の違いを強く感じた。ユースならではの視点が問題解決には不可欠であると感じた。

この様に、ユースの声を拾うことで初めてわかる現状があり、それをユースグループが伝えることによって、現状と施策を打つ側の認識の乖離を埋めることができることこそ、ユースグループのアドボカシー活動の重要な意義だと感じた。(高島)